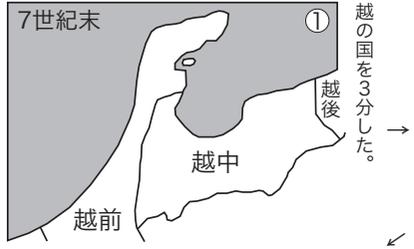


# 富山県ができるまで

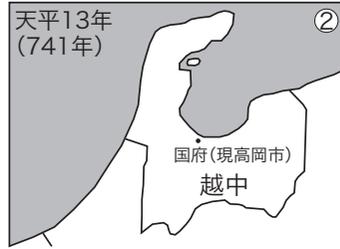
私たちが住んでいる富山県。印象が薄い県とか、地味な県とか言われているが、そもそもどんな歴史があるのか？今回はそれについて探してみる。

大化の改新（645年）の頃、北陸地方は新瀧県も含めて越国（高志、古志）と呼ばれ、阿倍比羅夫（7世紀中期の日本の将軍）が越国守に任ぜられたこともあった。越国は大和朝廷の東北平定の基地の一つとして重要な役割を果たしていた。7世紀末、越前・越中・越後と分かれても、この役割は続いた。越中守の文献上の初出は、天平4年（732年）任命の田口年足。万葉集の選者として有名な大伴家持が赴任したのは天平18年（746年）。大伴氏は代々武將で、武をもって朝廷につかえた名族。律令政府の要職に多くの人材を送り込んでいた。家持は、天平勝宝3年（751年）に少納言に任ぜられるまでの満5年、越中に在任した。国府は現在の高岡市伏木古国府にあった。この頃、壱田の永代私有が認め

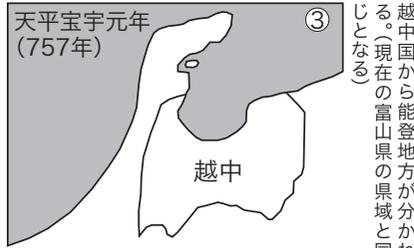
られた為、有力者が競って荘園を集めた。東大寺をはじめとした荘園は拡大の一途をたどり、公田は少なくなり、さらに豪族が荘官となって荘園の開発を進めた。中世の越中では、平氏全盛期には、平教盛・盛俊・業家が相次いで越中国司となった。源義仲が京を目指すと、新川郡の宮崎氏、砺波郡の石黒氏がそれに呼応。義仲は俱利伽藍峠で平維盛の軍を破り京に攻め入ったが、義仲軍は京で不評を買って、京を追われ、源義経によって滅ぼされた。鎌倉に幕府を開いた源頼朝は、義経追討を名目に諸国に守護を置き、勢力を拡大。越中の初代守護には重臣・比企能員が任ぜられた。承久の乱（後鳥羽上皇が鎌倉幕府倒幕の兵を挙げた）後は執権北条泰時（弟である朝時とその一族名越氏が任にあたった。幕府滅亡



越の国を3分した。



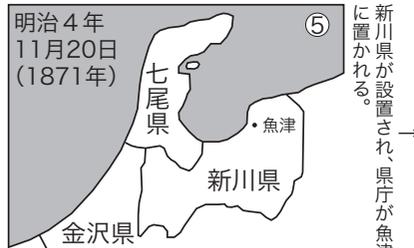
大宝2年、頸城、魚沼など4郡が越後に移され、天平13年能登地方が越中に編入された。



越中国から能登地方が分かれる。(現在の富山県の県域と同じとなる)



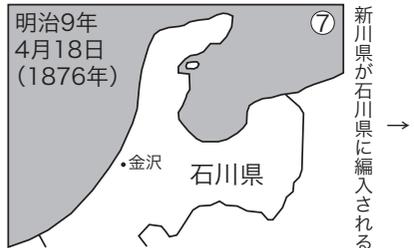
加賀藩から富山藩10万石が分立。明治4年（1871）7月14日、廃藩置県により富山藩が富山県となる。



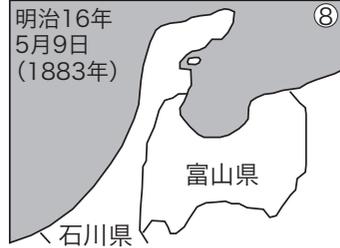
新川県が設置され、県庁が魚津に置かれる。



射水郡が新川県に編入され、県庁が富山に移る。



新川県が石川県に編入される。



石川県から分離、現在の富山県となる。

ホームページ「とやま統計ワールド」より

に際し、名越時育<sup>ときあり</sup>は出羽・越後の倒幕軍に攻められ、妻子を奈呉の海に沈め放生津城で自害した。

その後、天皇親政（天皇が自ら政治を行う）の復活をはかった建武政権は、越中国司に中院定清を任じたが、武家勢力を無視できず、士豪の出身といわれる普門利清を守護とした。が、武家政権を目指す足利尊氏の呼びかけで普門は中院を石動山（石川県中能登町）に滅ぼした。

それから越中は中央の政情変化につれて揺れ、室町幕府3代将軍・足利義満が畠山基国を守護としてからは、越中の武士はその家臣団として統制に服した。畠山氏は、越中の他に、紀伊・河内・山城の守護も兼ね、室町幕府の管領ともなった為、ほとんど越中に在国しなかった。そこで、有力な家臣を守護代として統治させた。砺

波郡は遊佐氏（本拠は蓮沼城／小矢部市）、新川郡は椎名氏（松倉城／魚津市）、射水・婦負二郡は執事の神保氏（放生津など／射水市）が支配した。神保氏は越中の守護代三氏の中で最も有力であった。もとは椎宗氏の出であるとい、鎌倉に出て畠山氏に仕えたが、畠山基国が越中を領する時に、入国したという。

越中の守護は基国の後、子の満家、その子の持国が継いだ。しかし、持国には当初子がなく、弟・持富の子・政長を養子としたが、その後実子義就が生まれ、政長を廃嫡。政長は、神保長誠に担がれ、管領細川勝元を頼り、その後援を受け管領に就任。しかし、山名持豊（宗全）らが義就を擁立、政長は罷免された。これを不服として細川勝元を頼り、挙兵。応仁の乱のきっかけとなった。

張り、遊佐・椎名・土肥ら越中の諸豪と連合し対抗したが討ち死にし、椎名氏は降参した。翌大永元年（1521年）、尚順は為景を越中新川郡の守護代に任じ、椎名氏を代官として神保氏を抑えさせた。越中の東部は長尾氏の勢力圏に入った。守護畠山氏は尚順の子・植長が継いだ。守護とは名ばかりで越中への勢威を失った。

慶宗の死後、神保氏は落ちぶれたが、その子・長職が神保家の再興を図り、天文12年（1543年）に神通川を越えて新川郡に進出、富山城を築き、椎名氏の領地を侵略し始めた。椎名長常は敗北し、翌年、畠山氏の分家である能登畠山氏の仲裁で和睦。神保氏は常願寺川以西を併呑し、越中最大の勢力を築き上げた。

永禄2年（1559年）、再び椎名氏へ圧迫を始めたため、翌

年、為景の跡を継いだ子・輝虎（上杉謙信）が越中に攻め入り、神保氏は敗北した。しかし、その後も甲斐の武田信玄と通謀して上杉・椎名氏と敵対したため、永禄5年（1562年）、2度にわたり謙信の再侵攻を受け、能登畠山氏の仲介で降伏した。長職は神通川以東を失ったが、本領の射水・婦負二郡支配権は従来通り認められた。

永禄9年（1566年）に能登畠山氏に内紛が起こり、義綱父子が重臣により追放され、長職は復帰に尽力するが果たせなかった。

永禄11年（1568年）、武田信玄の調略を受けた椎名康胤が突如上杉家を離反し、一向一揆と結んで武田方に寝返った。謙信はこれに激怒し、大軍をもって越中に侵攻した。天正元年（1573年）、武田信玄が亡くなると、背後の脅威がなくなった謙信は、越中の一

応仁の乱（1467年）では、10代将軍・足利義材（義植）が神保氏を頼って放生津に入り、越中御所、又は越中公方といわれた。

文亀元年（1501年）、長誠が死ぬと、子の慶宗が継いだ。越中守護の畠山尚順（政長の子）は河内にあり、越中は慶宗に任せたが、慶宗は尚順の意に背くことが多かったため、尚順は遊佐慶親や一向一揆衆など、主として砺波郡の諸豪の協力を求め、永正3年（1506年）、越後守護代の長尾能景に慶宗を討たせたが、かえって能景らを般若野で負死させた。

その後、永正16年（1519年）、能景の子・長尾為景が軍を率いて越中に入り、慶宗の本拠・二上山（守山城／二上山）に迫った。翌年も為景は越中に入り新川郡を席卷し、新庄に陣を構えた。慶宗は、神通川を超えて太田荘に陣を

揆や土豪を一気に平定し、大部分を掌握。さらに進んで加賀のなかばを征服し、天正5年（1577年）には能登畠山氏を滅ぼし、能登をも手中におさめた。

一方、織田信長は、はじめ謙信と同盟して信玄にあたったが、信玄の亡き後盟約を破り、浅井・朝倉を滅ぼし、天正2年（1574年）には一揆を破って加賀の南部にまで侵入し、上杉の勢力圏と接するまでになった。

加賀まで進出した織田勢は、越前北ノ庄に柴田勝家、越前府中に佐々成政・前田利家、加賀の御幸塚に佐久間盛政を配した。天正6年（1578年）、謙信が急逝した。上杉方勢力が動揺するのに乗じて、信長は彼のもとに亡命していた神保長職の子・長住を越中に返し、旧勢力の挽回をはかり、神保氏の分家の氏張もこれを助けた。



方について働いた功により、正式に加・越・能3ヶ国120万石の領有を徳川氏により承認された。

慶長10年、利長は家督を利常に譲り、金沢城から富山城に移るが、慶長14年(1609年)、い

たち川近くから出火した火事で、富山城や周辺の町が火事でほぼ焼失したため、利長は一時魚津城に移った。その後、高山右近に設計させたといわれる高岡城(現在の高岡古城公園)に移り、慶長19年(1614年)に亡くなった。利長は前年に曹洞宗の法円寺を創建しており、ここが菩提寺となった。

3代利常は、正保3年(1646年)利長の33回忌に、利長の院号にちなんで瑞龍寺と改称。新たに寺の建物の造営を行った(平成9年に仏殿などが国宝指定された)。

寛永16年(1639年)、3代利常が加賀小松に隠退する時、

幕府の厳しい監視の目をやわらげるため、加賀・越中・能登の120万石のうち、婦負郡6万石の他、下新川郡浦山辺、新川郡富山辺、加賀国能美郡の一部の計約10万石を次子利次に与えた。(富山藩の誕生。三子利治には大聖寺7万石を与えた。)なお、領地が分散して治めにくかったため、万治3年(1660年)、利次は加賀藩に届け出て、加賀藩と富山藩の領地を交換する許可を得て、エリアが婦負郡と新川郡の西部になったという経緯がある。

その後、越中は、江戸幕府が崩壊するまで、加賀藩(加賀前田家)とその支藩である富山藩(富山前田家)が治めた。

明治2年(1869年)6月17日、版籍奉還が行われ、加賀藩は金沢藩となった。明治4年7月14日、廃藩置県が行われ、富山藩は

の米沢紋三郎らを中心に分県運動が始まった。翌年、米沢らは呉東の豪農層を中心に越中改進黨をつくり、その代表に選ばれ、夏に分県請願を決議。米沢はその委員長になった。明治15年9月26日、米沢は分県建白書を持って入善を出発。上京後、1ヶ月余待つてようやく岩倉具視以下政府高官に分県

の必要を上申することができた。なお、分県建白は、米沢らだけではなく、砺波市小島生まれの石埜謙も東京府知事に行っている。

明治16年5月9日、佐賀県・宮

崎県・富山

県三県の設置の太政官達が発せられ、元老院の検視と天皇の裁下

歴代の富山県知事			
	氏名	就任年月	出身県
官選知事			
1	国重正文	M16.5	山口県
2	藤島正健	M21.10	熊本県
3	森山 茂	M23.7	大阪府
4	徳久恒範	M25.8	佐賀県
5	安藤謙介	M29.4	高知県
6	石田眞之助	M30.4	兵庫県
7	阿部 浩	M31.2	岩手県
8	金尾稜巖	M31.8	広島県
9	桧垣直右	M33.1	山口県
10	小倉 久	M35.2	群馬県
11	李家隆介	M35.12	山口県
12	川上親晴	M38.12	鹿児島県
13	宇佐見勝夫	M41.3	山形県
14	浜田恒之助	M43.6	高知県
15	木間瀬三	T4.8	千葉県
16	井上孝哉	T6.1	岐阜県
17	東園基光	T8.4	東京府
18	信太時尚	T10.12	秋田県
19	伊東喜八郎	T11.9	大分県
20	岡 正雄	T13.7	島根県
21	白上佑吉	T15.9	東京府
22	白根竹介	S2.5	山口県
23	山中恒三	S4.2	山口県
24	鈴木敬一	S6.4	東京府
25	齋藤 樹	S7.6	千葉県
26	土岐銀次郎	S10.5	和歌山県
27	矢野兼三	S13.4	大阪府
28	町村金五	S16.1	東京府
29	坂 信弥	S18.4	山口県
30	西村彰一	S19.2	東京都
31	岡本 茂	S19.7	奈良県
32	吉武恵市	S20.10	山口県
33	田中啓一	S21.1	岐阜県
34	石丸敬次	S21.7	福岡県
35	羽根盛一	S22.2	福井県
公選知事			
1	館 哲二	S22.4	富山県
2	高辻武邦	S23.11	富山県
3	吉田 実	S31.10	富山県
4	中田幸吉	S44.12	富山県
5	中沖 豊	S55.11	富山県
6	石井隆一	H16.11	富山県

「富山県」(高井進著 昌平社)より

をへて、6月4日内務省の告示によつて16年7月1日富山県庁が開庁した。

初代県知事には、国重正文が任命された。彼は萩藩士(山口県)の長男として生まれ、富山に赴任するまでの10年余を京都府知事のもとで累進。彼は水害克服のため全力を尽くし、近代医療の導入にも献身。富山県の石川からの真の独立は教育水準を上げるにあるとして、自ら実利的カリキュラムを作成し、児童の就学率の向上にも努めた。明治18年には、財政難

富山県に、金沢藩は金沢県となった。同年11月20日には、婦負郡、新川郡、砺波郡は新川県となり、射水郡は七尾県に属することになった。その後、明治5年9月27日、越中のエリアは新川県になった。ところが、明治9年4月18日には、石川県に編入された。

明治政府が当初から最も力を注いでいたのは、旧藩体制を打破して地方を完全に官治することであり、その一環であったのであろう。

明治12年、石川県会が開会されたが、当初から加賀・越前出身者は道路改修を、越中側は河川の治水工事を急務として対立した。当時の越中選出議員の多くが豪農で、農村が毎年の水害に悩まされていたことから当然の主張であった。明治14年に越前が石川県から分離したことが越中議員を刺激した。この年、旧十村(大庄屋)家

の中で、富山県中学校を開校し、これが中等教育機関の始まりとなった。余談だが、明治19年から明治21年4月まで、滝廉太郎の父・滝吉弘が、富山県書記官(副知事)として、国重県政を支えた。

参考文献「越中から富山へ」(高井進著

山川出版社、「越中の明治維新」(高井進著 桂新書2)、「明治・大正・昭和の郷土史 18 富山県」(高井進編 昌平社)、「富山県の歴史」(坂井誠一著 山川出版社)、「富山県の歴史散歩」(富山県歴史散歩研究会 山川出版社)、「とやま近代化ものがたり」(富山近代史研究会編 高井進著 北日本新聞社)、「佐々成政(悲運の知将)の実像」(遠藤和子著 サイマル出版会、富山市郷土博物館「博物館だより」、Wikipedia、他